
明日も晴れるといいね(泣)

足利 灯尊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日も晴れるといいね（泣）

【Nコード】

N6443Z

【作者名】

足利 灯尊

【あらすじ】

河東諄^{かとうしゅん}、高校一年、帰宅部所属。どこにでもいるような、いや、どこにでもいる青年の彼はヤンデレ？な幼馴染の清水寧々（しみずねね）がいつもベッタリの学校生活を送っていた。しかし、転校生の登場や、突然押しかけて来た金髪美少女の所為で夜も眠れない日々を過ごすことになる！？

どうも、はじめまして（前書き）

どうも、足利灯尊です。他の小説が行き詰まったので時間潰しに書いたものですが楽しんで頂けると嬉しいです。

どうも、はじめまして

時刻は午前6時。今、俺はベッドで身構えていた。何故かって？そろそろあいつが来るからだよ。

ガチャッ！

来たっ！！

「おはよー！諄君起きてる？起きてなかったら恋人のキスで起こしてあげるー！！」

そう、俺が身構えていた理由、それはこの危ない幼馴染から己の身を守るためなのだ。

「せいっ！」

とっさに枕をヤツの顔面に投げつける。

「きゃあっ」

枕は見事に命中し、ヤツの動きを止めることに成功した。

「ううゝ。ひどいよ諄君…」

「朝から不埒な行為をしようとする奴に言われたくないよ」

毎朝同じ会話。自分でもよく飽きないと思う。ま、飽きた時点で俺の唇はヤツに奪われてしまっただけだな。

「諄君ったら、照れちゃって。そんなところも大好きだよ」

「はいはい。朝飯は？」

「む。そこは『俺も寧々が大好きだよ』って返さないといけないのよ！ほらほら！！」

「飯は？」

「……………できてます」

「ありがとな」

「はああん。諄君が『ありがとな』って。私に！笑顔で『ありがとな』だって！ああ……………気絶しそう……………」

なにやらブツブツ独り言を言い出したヤツを置いて俺は部屋を出た。

はじめまして皆さん、俺の名前は河東諄^{かとうしゆん}。現在高校一年生。帰宅部！以上！！

すいません。自己紹介すぐに終わるようなしよばい人間で
と、そんなことを嘆いていたらヤツが来た。

「諄君！！ひどいよ！勝手にいなくなつて。私を置いていくなんて
！！」

「いや、朝飯食うために部屋から出ただけっおうっ！」

「置いていかないでよーグスッ」

朝からナイスなタックルをしてきたコイツは清水寧々（しみずねね）
。俺の幼馴染で、現在俺の恋人……ではない。本人が勝手に言っ
ているだけである。

「わかった、わかったから」

「もう置いていかない？」

「うっ……」

涙目&上目づかいで迫ってくるな。これだけは何度やられても慣れ
ない。

「善処します……」

「ダメ！誤魔化さないで！」

「あゝ！分かりました！」

「ふふつ。じゃあ朝ご飯にしようか」

何なんだ、こいつは。さっきは泣き顔だったのにもう笑顔に戻ってる。

「で、清水さん？これは何？」

俺は並べられている朝食を見て固まる。

「『清水さん』じゃないでしょ！！」

声を張り上げ、鬼のような目で手には包丁。俺は従うしかなかった。

「ね、寧々。……これは何？」

「これ？これは私が作った牛丼だよ」

「朝から牛丼？そして何故牛丼？」

「諄君には私が作ったおいしいものを食べて欲しくて、でも私料理できないから簡単なものにしたの」

「それで牛丼か……」

「大丈夫！お米もお肉も最高級ブランドだから。おいしいはずだよ」

俺が気にしているのはそんなことではない！しかし時間も無いので俺は仕方なく食べることにした。

「いただきます……パクツ……ごちそうさま」

「なんでよ！まだ一口しか食べてないでしょ！！」

「アホかお前は！！朝からこんな油まみれのもの食べたら胃がもたれるに決まってる！ほら学校行くぞ！」

「しょうがないな。うん、行こっ！」

俺たちは電車通学だ。といっても学校の最寄り駅までは二駅しかない。さっきの家での出来事でわかった通り、俺は一人暮らしだ。母さんは俺を産んで死に父さんはアメリカに出張中だからだ。家はマンションだ。俺の隣を機嫌よく歩いている幼馴染、清水寧々は高校から俺が一人暮らしになるのを聞いて、俺の部屋の隣を小遣いで買い取りやがった。言い忘れていたが寧々は俺の父さんが勤める会社の社長の娘。お金ならあるということね。

「そつえばもう10月か…」

「それがどうかしたの？」

「いや、時間が経つのは早いなと思ってね」

「諄君、おじいちゃんみたいだよ」

そういつてクスクス笑う寧々。こうして見たら美少女なんだがな……。そう、寧々は高校に入って一週間で15回も告白されるほどの美少女なのだ。いまでもたまに告白されるらしい。そんな女の子と幼馴染の俺を羨ましいと思う奴らは学校でも大勢いる。

「まもなく……まもなく……。御下りの際は……」

「着いたよ諄君」

「言われなくてもわかってます」

学校の最寄り駅に着き、改札を出る。周りには同じ制服を着た男女が何人もいて、同じ方向に歩いていた。

「はい、諄君」

「………何？」

俺に手を差し出してくる寧々。その行為の意味はわかっているが、あえてとぼける。

「むっわかってるくせに」

「何のことかわからないので僕はこれで」

そういつて俺は校門めがけて猛ダッシュ！公然でそんな恥ずかしいことできる訳がない。

ガシッ！

あら？何かが僕の肩を掴んで動けないよ？

「ダメだよ諄君。私から離れちゃ」

言うまでもなく俺の肩を掴んでいたのは寧々。顔は笑ってるが目は笑っていない。

「……………はい」

「じゃ、一緒に……学校に行こっか」

「すいませんでした」

何故か謝ってしまう情けない俺。誰か慰めて……………

俺の学校生活見ます？

寧々と一緒に校門をくぐり、寧々と一緒に靴箱で履き替え、寧々と一緒に教室に……って！！いい加減勘弁して！！

「あの〴〵寧々さん？教室にも入ったし、そろそろ手を離してくれませんか？」

「ダメ！！さっき逃げようとしたから、こうやって捕まえておかない」と

そう、俺と寧々はずっと手を繋いだまま教室まで来たのだ。その寧々の俺の手を握る力が尋常じゃないので俺の手が紫色に変色しているのは言うまでもない。

「頼むって！もう手が、手が〴〵！」

「逃げない？」

「逃げない！もう逃げないからっ！！」

そう言うつと寧々はやっと手を離してくれた。

「じいーーーーー」

視線が痛い。教室の皆さんのではなく寧々の。

「な、何ですか？」

「諄君が逃げないか見張っているの」

言葉が出なかった。でも涙は出た。誰か助けて（T―T）

「どうしたの諄君。なんで泣いてるの？」

「アハハ……寧々が僕のこと好きでいてくれて悲しいからだよ」

「もうっ諄君ったら。照れ屋さんだね」

………とりあえず自分の席に座る。すると二人の男子が俺のところに来た。

「よっ諄！今日もおつかれ！」

こいつは渡部輝^{わたべあきひ}。高校から知り合った友達。なかなか気の合う奴だ。

「相変わらずの登校だな諄」

こいつは西口涉^{にしぐちわたる}。中学からの友達。そして巨人。高一で身長が196センチもあるバケモノだ。バレーボール部で活躍中。

「ホント、毎朝たまらないよ……」

「贅沢なやつだな。毎日あんなに可愛い女の子に迫られて何も感じないのか？」

「輝。高校からの付き合いのお前にはあの女の凄まじさは分かん

だろうな」

「ありがとう涉。理解者がいてくれるのがこんなにありがたいものだと教えてくれて」

俺は学校では大抵この二人と一緒にいる。喧嘩も無く、本当に良い友達を持ったと思っている。

「オーツス。じゃHRはじめんぞ」

中年男もとい担任が教室に入って来てクラスメイトたちが席に座りだす。

俺の学校生活はいつもこうして始まる。

昼休み

「うおおおおおお！……！！！」

チャイムが鳴り終わり、号令と同時に学食にダッシュ！理由は注文のために行列に並ぶのが嫌だからというわけではなくて、ヤツから逃げるためだ。

メキッ

何の音かって？答えはカンタン！俺の手がヤツに掴まれた音だよ。

「どこに行くの？諄君？」

「が、学食だよ？それより手、手を離してくださいませんか？」

「普通行くなら私と一緒にだよな？」

「な、何が普通だ！」

メリメリッ！

「ぐあっ！すいませんでした！お供させてください！」
「うんっ！」

くっ、いつもいつもなんて握力してやがる。まるでゴリラ並だ。こいつはホントに女か？

「じゃあな〜諄」

「すまんな諄」

輝、涉、せめて助ける素振りぐらい見せて。

学食

端から見たら手を繋いでいるラブラブカップル。だがよく見て欲しい。俺の手は紫。

「諄君は何食べるの？」

「そうだな。今日は中華かな？」

「じゃあ私も中華！」

ラーメンの入った皿を持って空いている席に座る。寧々は俺の隣に座る。

「……………あの、いつも聞くけどなんだ」

「少しでも諄君の近くに居たいから!!」

「……………はい…」

「じゃ、はい、あーん」

寧々は自分のラーメンを俺に向けてくる。

「いや、自分の食べるから」

「一緒だからいいでしょ？あーん」

「……………」

「あーん」

「はあ……あ、あゝん」

ズルズルズルズル

「おいしい？」

「いつもの学食のラーメンだな」

「もお。そこは『寧々が食べさせてくれたものなら何でもおいしいよ』って言わなきゃダメでしょ?」

「さあ！速く食べないと綱が伸びちゃうな！」

「……もうっ。諄君の意地悪」

何とか回避できたな。危なかった。

放課後

「うおおおおお！！！！！！！！！！」

チャイムが鳴って号令と（中略）今度こそヤツから逃げてやるぜ！

メキッ

「諄君？どこに行くの？」

「すみませんでした。一緒に帰らせてください」

「うんっ！」

クソッ！何故いつも捕まるんだ！

「じゃあな」諄

「すまんな諄」

さようなら僕の友達。

こうして俺の学校生活は終わる。

帰宅後が一番しんどい……

今、俺は俺の住むマンションまであと2分というところを寧々と歩いている。ちなみに今日の学校でのことは最初こそクラスのみんなに驚かれたものの、毎日続くうちに当然の行事のようになってしまいい、今や全校生徒の常識となってしまうた。茶化されることがなくなっただのは嬉しいのだが、どこか悲しい。

「諄君！あのね……」

「今日は俺の家はダメだぞ」

「まだ何も言っていないでしょ！？ふんっ！いいもんっ！どうせ合鍵貰ってるし」

そうだった……俺のオヤジ、寧々に『息子をよろしく』とか言うて合鍵渡しやがったんだった。

「わかったよ」

「やった！諄君優しい！！大好きっ！！」

隣に部屋借りてるクセに、寧々のヤツ全く使っていないんだよな。何故か俺の家に寧々の部屋があるし。

「ただいま」

「ただいま」

「何でお前が『ただいま』なんだよっ!？」

「そんなことより諄君」

こいつ、スルーしやがった。

「今日の夕飯は何にするの？」

「そうだな……今日は疲れたからカレーでいっか」

簡単だしね。ちなみに普段料理を作るのは俺。寧々の料理の腕は壊滅的なため俺がいつも作っている。

「で、寧々。いい加減手を離して」

俺と寧々は学校からずーっと手を繋いだまま帰宅していた。離れたのは靴を履き替えるときと改札を通るときぐらい。

「やだ」

「やだじゃない。料理ができないだろ？」

「やだ」

「いやだから、やだじゃなくて」

「やだっ!!」

あら？なんだか寧々の様子がおかしい。いつもなら素直に手を離してくれるのに。

「どうしたんだよ？寧々。とりあえず夕飯食ってから話をしよう。なっ？」

「……………」

そう言つと寧々はやっと手を離してくれた。すぐに料理の準備にとりかかる。一体どうしたと言つんだろうか？明らかにいつもと雰囲気が違う寧々に戸惑う俺。

カチャカチャ

「……………」

「……………」

只今食事中。いつもなら寧々が『あなたゝはい、あゝん』とか迫ってくるのだが、今日はひたすら無言を貫いている。

「「ごちそうさま」」

夕飯を食べ終わった俺と寧々。俺はいま二人分の食器を洗っている。

「ねえ……諄君」

さっき俺が言った食後になったからか寧々が話しかけてくる。

「なんだ？」

「今好きな人いる？」

いきなりヘビーな質問だこと。思わず手が滑って食器を割ってしまいそうになったじゃん。

「い、いないよ」

「何で？」

「は？」

???????今の俺の返答に『何で？』って普通います？

「いや、何でって言われても困るんですが……」

俺は食器を洗い終わる。

「何で私のこと好きにならないの？私毎日こんなにアプローチしてるのに」

「それと好きになるかは別の話じゃないか……」

「じゃあ、どうしたら諄君は私に振り向いてくれるの？」

「それは……………」

ヤバイ。寧々のヤツ、本気だ。今までこんなに迫ってくることもなかったのに。てゆうかいつの間にかリビングのところまで追い詰められている。

「私はこんなに諄君のこと好きなのにつ!!!」

「おわっ!?!」

俺は寧々に押し倒されてソファーに寝転がる体勢に、その上に寧々が俺に抱きつく形に。

「好きなの……………諄君……………」

「え……………あ……………」

何でだろう。寧々に抱きつかれるのには慣れているはずなのにドキドキしてしまう。

「諄君は私のこと好きじゃないの?」

「お、俺は……………」

情けない。寧々はこんなに自分の気持ちに正直なのに俺は自分の気持ちすらわからない。

「……………」

「……ごめんね」

そう言うと寧々は俺から離れて背を向けた。

「ごめんね諄君。どんなことしても諄君が私に振り向いてくれないから不安だったの」

寧々の背中が少し震えている。俺はそれを見てもたつてもいられなくなり、寧々を後ろから抱き締めた。

「謝るのは俺の方だよ。寧々が苦しんでいる原因が俺なのに気づいてやれなくて」

「諄君……」

「でも同情なんかで寧々と付き合うなんてできない。寧々のことをちゃんと好きになったら付き合うつてことで納得してくれないか？」

寧々は俺の腕を解いて、俺の方を向いてきた。

「ずるいよ諄君……そんな言い方されると断れないよ……。私のお願いを聞いてくれたら納得してあげる」

「？お願い？」

「うん。明日からまた仲良くしてくれること」

「そんなことお願いされなくても当たり前前だろ？」

「えへへ」

寧々は俺の返答に満足した様子でまた俺に抱きついてきた。

「あとひとつ、一緒にお風呂入ろ？」

「それはダメです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6443z/>

明日も晴れるといいね(泣)

2011年12月21日19時51分発行